

ファミリー

2006(平成18)年11月24日鑑賞(ソニー・ピクチャーズ試写室)

★★★



監督・脚本=イ・ジョンチョル/出演=スエ/チュ・ヒョン/パク・チビン/パク・ヒスン/オム・テウン(ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント配給/2004年韓国映画/96分)

……父と娘の確執と愛情を描いた2004年の地味なヒット作が今、日本に上陸! 「涙の女王」は『冬ソナ』のチェ・ジウだけではなく、この映画で新人賞を総ナメにしたスエの異名もそれ。悪役となるヤクザの徹底的なワルぶりが目につくが、『グエムル 漢江の怪物』とはまた一味違う、韓国社会の家族の絆の濃さと父娘愛の強さをじっくりと堪能したいもの……。そして、いじめ、自殺が相次ぐ今の日本社会における、家族の絆崩壊の風潮を反省する1つの糧としなければ……。

なぜか、2004年の映画が今……

韓流ブームが定着してくる中、最近は『トンマッコルへようこそ』(05年)、『グエムル 漢江の怪物』(06年)、『王の男』(05年)など韓国での大ヒット作が比較的早く日本でも上映されるようになってきた。しかし、この『ファミリー』は2004年の韓国映画だから、『ブラザーフード』『SILMIDO(シルミド)』『オールド・ボーイ』などが大ヒットした年。これら話題作のテーマの重厚性やアピール力に比べると、『ファミリー』は単に(?)父と娘の愛をテーマにした韓国ではよくあるパターン(?)だから、その他たくさんの作品の中の1つ……。

ところが、この映画は観客の口コミによって『ブラザーフード』の1300万人には及ばないものの、200万人を動員するヒットに。そんな実績を引っ提げて日本上陸を果たしたが、『グエムル 漢江の怪物』で強烈にアピールされた韓国人の家族の絆の強さに比べて、それがきわめて希薄になっている今の日本で、父と娘

の愛というテーマがどの程度受け入れられるのだろうか……？

この娘にしてこの父あり……

刑務所帰りの少女ジョンウン（スエ）は、窃盗と傷害の罪で3年の刑期を務めあげ、今家に帰ろうとしているところ。顔だけ見ればあどけない少女そのものだが、口数が少なく、じっと相手を見据える目はかなりの修羅場を踏んでいる感じ……。そんなジョンウンは、保護観察官の紹介によって何とか美容院での仕事を見つけてもらった後、家に戻ってきた。そこに住むのは、父親のチュソク（チュ・ヒョン）と10歳の弟のジョンファン（パク・チビン）。「ジョンウンは留学している」という父親の言葉を素直に信じているジョンファンは、ジョンウンが帰ってきたのを無邪気に喜んだ。しかし3年ぶりの娘との再会にもかかわらず、チュソクが娘に投げかけたのは「なぜ帰ってきた」というキツイ一言。観客は誰もが「そりゃないだろう」と思ったのでは……？ 父親のそんな言葉にたちまちジョンウンが反発したのは当然。物語の導入部分において、「この娘にしてこの父親あり」という強烈なインパクトがスクリーン上から観客の胸に……。

ワルはとことんワルが韓国流……

私はキム・ギドク監督の『悪い男』（01年）は観ていない。しかし、パク・チャヌク監督の『オールド・ボーイ』やイ・ビョンホン主演の『甘い人生』（05年）を観ると、韓国のワル＝ヤクザのワルさは日本以上に徹底している感があるが、これはひょっとして家族愛の絆の強さの裏返しかも……？

3年も刑務所に入っていたジョンウンも不良少女だったのだろう。出所後そんなジョンウンが気安く訪れたのが、かつての不良仲間のチャンウォン（パク・ヒスン）とその弟分のドンス（オム・テウン）。ところが、3年もの年月は人を大きく変えるもの。かたや世間の片隅でムシヨ暮らしをしてきたジョンウンに対し、今やチャンウォンは多くの子分を抱え、でっかいナイトクラブを経営する大ボスに「成長」していた。しかも、若くしてのし上がってきたチャンウォンだから、やることもキツそう……。今日も、ヘマをやらかした子分たちをボコボコに殴りつけ、ドンスに対しては「きちんと管理をしないとナ」とキツイお達しを……。

そんなチャンウォンのところを昔なじみのような調子で訪れ、しかもチャンウォンの傷害の罪をかぶって身代わりとしてムシヨに入ったことをチラつかせながら、美容院をやるための元手として5000万ウォンを「要求」したから大変。今やとことんワルの大ボスに変身し、ドンスからも恐れられる存在となったチャンウォンが、そこでジョンウンに対してとった行動とは……？

憎っくき白血病がここにも……

「美人薄命」をあらためて世に知らしめたのが夏目雅子。そして、その死の原因は白血病。また近時、骨髄バンクの呼びかけに登場し、『アメイジング・グレイス』を熱唱しているのが在りし日の本田美奈子。彼女も白血病の犠牲者の1人だが、その死が与えた衝撃は大きかった。

娘のジョンウンに対してキツイひと言を投げかけた父チュソクは、今は市場で小さい魚屋を営んでいるが、元は優秀な警察官。ある時、ある事情によって片目の視力を失ったため、警察官として出世街道を歩むことを諦め、辞職せざるをえないことに……。ジョンウンがそんな厳格なチュソクを嫌っているのは、母親が6年前に亡くなったのは、母親に対して暴力を振るっていた父親のせいだと考えているため。しかして、その真相は……？

他方、無邪気に「お父さんは今薬を飲んでるよ」と話しかけてきた弟の言葉が気になったジョンウンは、父親の親友である医師に病名を尋ねると、何と父親の病気はあの憎っくき白血病。骨髄移植しか生き残る道がないため、医師は娘のジョンウンに移植のための検査を勧めたが、父親との確執に苦しむジョンウンは、素直にそれに応じるのだろうか……。さらに、父親が片目を失明するに至った事情についても、ジョンウンは医師から衝撃の事実を聞かされることに……。

白血病克服のための骨髄移植の期限はすぐそこに迫っている。そんな中、さまざまな確執を乗り越え、やっと今父と娘の心は1つになろうとしていたが……。

チャンウォンの執拗な要求は一体どこまで……？

ジョンウンから5000万ウォンを要求されたチャンウォンは、ジョンウンが自首する前に事務所を荒らして大金を盗んだと疑っていたため、逆に「その金をすぐ

に返せ」と要求したうえ、弁解しようとしたジョンウンをいきなり灰皿で殴りつけるという暴挙に……。チャンウォンのワルぶりはそれにとどまることなく、父親にも金を返せと要求してきた。この父と娘の確執を観客席から見ているとイライラしてくるが、それはその確執をまんまと利用して、チャンウォンが漁夫の利を得ようとしているため。すなわち、この父娘は、チャンウォンの策略によって二重払いをさせられる羽目に……。さらにひどいのは、チャンウォンは要求を途中からさらにアップさせ、警察の副署長に対してジョンウンの若く美しい肉体を提供するように、とまで……。こりゃ一体どこまでエスカレートしていくのだろうか……。そしてそれにチュソクとジョンウンは耐え、乗り切ることができるのだろうか……？

どんなクライマックスに向かって……？

中盤はジョンウンと父親チュソクの心が少しずつ通い始める中、「これでもか、これでもか」という形でチャンウォンによる「いじめ」が続き、せつかくの父娘の心の交流が台無しになっていく姿をしつこく描いていくため、観客はかなりイライラ状態が続くはず……。そんな中、クライマックスに向けて形成されていくのが、娘は父親の命を救いたいという一念、そして父親は娘の未来を守りたいという一念にもとづくある決意……。本当はそれを2人で相談しながらやれば、もっと合理的で生産的な行動に結びつくのだが、全く別々に意思形成されていくのが少し残念……。しかし少なくとも、父と娘の互いを思う気持ちが後半では完全に1つになっていることは明らかで、多くの観客はそこに感動を覚えるはず……。

他方、「おごれる平家は久しからず」とはよく言ったもの。その理はどの国でも同じだが、この映画の場合の「平家」とはもちろんチャンウォンのこと。自力でのし上がってきた実力者であることは周りのみんなが認めているものの、あまりの「恐怖政治」はかえってマイナス。そのうえトップがとる政策には、どんな組織においてもそれなりに部下を納得させる合理性と正当性が必要だが、チャンウォンがジョンウンとチュソクに対してとり続けている「政策」は、弱い者いじめそのもの。したがって、昔からチャンウォンに付き添ってきた弟分であるドンスの心は、次第にチャンウォンから離れていたようで、ある日ある時、ドンスか

らジョンウンに対して意外な提案が……。

こちら辺りからこの映画は急にクライマックスに向かっていくことに……。さあ、皆さん決してスクリーンから目を離さないように……。

新人賞総ナメにした「涙の女王」……

この映画でヒロインのジョンウンを演じたスエはたくさんのテレビドラマに出演し、「涙の女王」と呼ばれている1980年生まれの若手女優。映画はこれが初出演だが、この映画での涙を抑えた「涙の女王」の見事な演技により、青龍賞新人女優賞をはじめ、各種の新人賞を総ナメに……。本作では、ムシヨ帰りにチャンウォンを訪れた際チャンウォンにボコボコに殴られたことにより、顔に少し傷を残した状態でスクリーンに登場しているため、本来の美人顔を拝めないのが少し残念で、「演技力優先」の見方をせざるをえない。しかし今後は、正当派韓国美女を「売り」にした映画にも登場してもらいたいものだが……。

数枚の写真が物語るものは……

クライマックスの「攻防」戦が終わると、ラストには静かなシーンが登場する。それはジョンウンが今はいなくなった父チュソクの部屋でタンスの引き出しの中を整理するシーン。欠かさず飲んでいた白血病の薬は今ももう不要。そんな作業を続ける中で発見したのは、引き出しの底にあった古めかしい封筒……。その中に入っていたのは、父親が大切に保管していた古ぼけた数枚の写真だった……。その1枚目は若き日の父親と一緒に写った幼児時代のジョンウンの姿。続いてウエディングドレス姿の母と並んだ父の姿や警察官の帽子を目深にかぶった将来を嘱望された若き日の警察官の姿の写真などが……。娘に対してあんなにきつくあたっていた父親だったが、その心は常にこれらの写真と共にあったことが今更ながら明らかに……。 「お父さん、私はあなたの娘で幸せでした」、ジョンウンが心の底からそう叫んでいることが、「涙の女王」の涙をこらえた表情とほんのわずかにこぼれてきた涙によって、十分に理解できるはず。日本でもこんな父と娘の愛を綴った本格的な映画をつくってほしいものと、ふと思ったが、それはひょっとして私が年をとってきたせい……？

2006(平成18)年11月25日記